

多汗症治療薬（プロパンテリン臭化物）による 口渇に対する白虎加人参湯併用の有用性について

コスモメディカルクリニック（大阪府） 河平 一宏
大阪中央病院 皮膚形成外科（大阪府） 谷口 彰治

多汗症の特徴として社会的な活動範囲が広く、生産性のある年代の罹患率が非常に高いことが挙げられる。患者は精神的な苦痛を受けQOLの低下が問題となる。薬物治療としてプロパンテリン臭化物が投与されることがあるが、口渇、顔面紅潮などの副作用により服薬継続が困難なケースが散見される。白虎加人参湯はのどの渇きやほてりに使用されるが、プロパンテリン臭化物と併用することで副作用を軽減できた症例を経験したので報告する。

Keywords 白虎加人参湯、プロパンテリン臭化物、口渇、多汗症

はじめに

多汗症は全身の発汗が増加する全身性多汗症と、身体の一部のみの発汗量が増加する局所性多汗症に分類される。全身性多汗症には特に原因のない原発性（特発性）全身性多汗症と、他の疾患に合併して起きる続発性全身性多汗症がある。一方、局所性多汗症にも原発性（特発性）と続発性がある。原発性多汗症の特徴として、社会的な活動範囲が広く、生産性のある年代の罹患率が非常に高いことが挙げられる。このことによって患者は精神的な苦痛を受けており、QOLの低下が問題となる¹⁾。

治療法としては塩化アルミニウム外用療法などがあり²⁾、抗コリン剤であるプロパンテリン臭化物も日本皮膚科学会の「原発性局所多汗症診療ガイドライン」でC1に推奨されている¹⁾。

プロパンテリン臭化物は「下記疾患における分泌・運動亢進並びに疼痛 胃・十二指腸潰瘍、胃酸過多症、幽門痙攣、胃炎、腸炎、過敏大腸症（イリタブルコロン）、睪炎、胆道ジスキネジー、夜尿症または遺尿症、多汗症」という効能・効果を持った薬剤である。副作用として口渇が30%ほど認められる。また、発現率は0.1%とほとんどないが、顔面紅潮も報告されている³⁾。このような副作用のために服薬継続が困難となる症例も散見される。

漢方薬の白虎加人参湯は、「のどの渇きとほてりのあるもの」という効能・効果を持っており、ドライマウス⁴⁾、向精神病薬による口渇⁵⁾、顔面のほてり⁶⁾に対する有効性が報告されている。

そこでプロパンテリン臭化物の副作用軽減を目的に白虎加人参湯を併用し、有効性を得ることができた症例を経験したので報告する。

方法

対象は2013年6月から9月までに当院に受診した多汗症の患者で、クラシエ白虎加人参湯エキス錠とプロパンテリン臭化物を新規に服用し、2回以上再来した患者に対し同意を得て、投与前、再来時、判定時に口渇、のどの渇き、口の中のネバネバ感をVASで評価し、ほてりを「0：なし、1：軽度、2：中等度、3：高度」の4段階で問診をした。

結果

結果を表1に示す。判定時までには複数回再来院している場合は、その中の最大値を調査中の数値とした。調査できた症例は5例で男性4名、女性1名であった。年齢は30～41歳、 35.4 ± 4.4 (mean \pm SD)、多汗症の罹病期間は症例2が5年3ヵ月、他の4例は2ヵ月、白虎加人参湯の投与期間は調査開始時から最終判定日までで33～89日、 66 ± 21 日 (mean \pm SD)であった。

口渇は調査開始時 34.8 ± 30.9 mm、調査中 41.0 ± 34.9 mm、判定時 39.8 ± 25.1 mmであり、のどの渇きは調査開始時 45.8 ± 22.4 mm、調査中 39.5 ± 26.0 mm、判定時 32.5 ± 29.2 mmであった。ネバネバ感は調査開始時

27.0±22.4mm、調査中38.0±30.2mm、判定時15.3±25.4mmであった(表1)。

考察

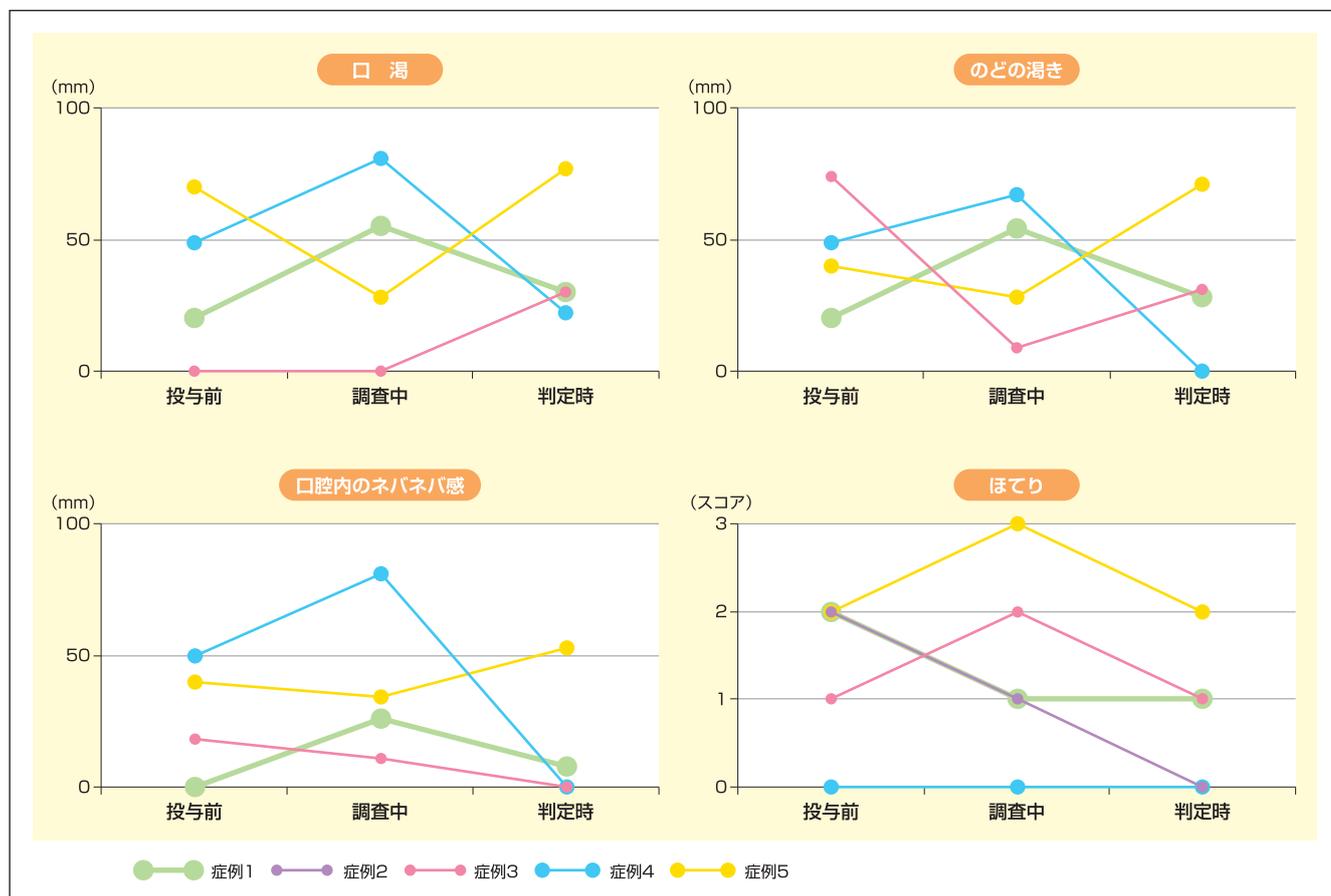
今回、プロパンテリン臭化物の副作用と思われる口渴、のどの渇き、口腔内のネバネバ感、ほてりに対する白虎加

人参湯の抑制効果を調査した。症例1、4でいずれの症状も調査中に悪化はしたが判定時には改善する傾向がみられ、ほてりについても症例3、5で同様の傾向がみられた(図1)。これはプロパンテリン臭化物の服薬によって副作用が発現したが、白虎加人参湯を併用していたことにより症状を軽減できたと推察される。また、白虎加人参湯による有害事象もみられなかったことから、併用療法は多汗症

表1 患者背景と結果

症例	性別	年齢	投与期間(日)	VAS (mm)									スコア		
				口渴			のどの渇き			ネバネバ感			ほてり		
				投与前	調査中	判定時	投与前	調査中	判定時	投与前	調査中	判定時	投与前	調査中	判定時
1	男	41	89	20	55	30	20	54	28	0	26	8	2	1	1
2	男	32	73	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	0
3	女	36	33	0	0	30	74	9	31	18	11	0	1	2	1
4	男	38	70	49	81	22	49	67	0	50	81	0	0	0	0
5	男	30	64	70	28	77	40	28	71	40	34	53	2	3	2
mean		35.4	66	34.8	41.0	39.8	45.8	39.5	32.5	27.0	38.0	15.3	1.4	1.4	0.8
SD		4.4	21	30.9	34.9	25.1	22.4	26.0	29.2	22.4	30.2	25.4	0.9	1.1	0.8
n		5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5
median		36	70	35	42	30	45	41	30	29	30	4	2	1	1

図1 白虎加人参湯の副作用抑制効果



治療において有用性が高いと考えられた。

白虎加人参湯は五つの生薬から構成されており(図2)、石膏、知母は消炎、解熱に働き止渴する。人参、知母、甘草、粳米は滋潤し体内の水分を保持する⁷⁾。このような作用からのどの渇きやほてりに効果があったと推察される。

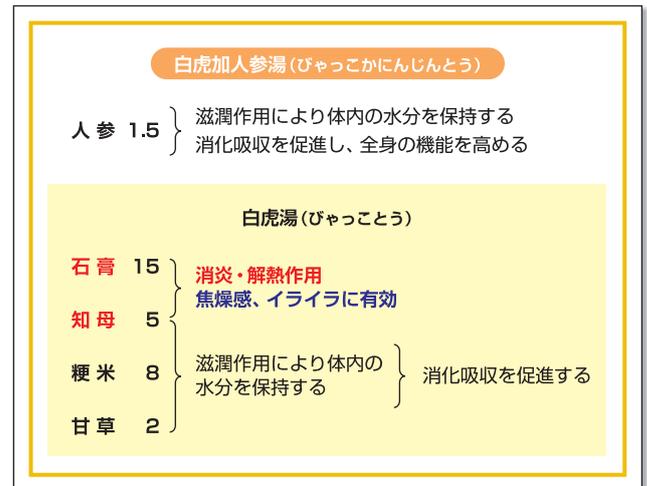
白虎加人参湯については、和木ら⁵⁾、井上ら⁸⁾および矢久保ら⁹⁾が薬剤によって生じる口渴、杉田⁶⁾は顔面のほてりに対する有効性を、渡邊ら¹⁰⁾は反復性耳下腺炎、内藤ら¹¹⁾は慢性血液透析患者の体重増加、堀場ら¹²⁾は更年期男性の不定愁訴、戸谷⁴⁾はシェーグレン症候群などによるドライマウスに有効であったと報告している。

また、今回の調査では白虎加人参湯の錠剤を調査薬剤とした。筆者は漢方薬を継続して服薬するには錠剤という剤型が最適であると考え投与している。期待どおり、患者も脱落することなく服薬継続をしている。また患者の反応から、筆者は白虎加人参湯の有用性について手応えを感じており、今後さらなる症例の集積を検討している。

まとめ

多汗症治療に対してプロバンテリン臭化物と白虎加人参湯の錠剤の併用投与は有用性の高い治療法と考えられる。

図2 白虎加人参湯の生薬構成



【参考文献】

- 1) 田中智子 ほか: 原発性局所多汗症診療ガイドライン, 日皮会誌, 120 (8): 1607-1625, 2010
- 2) 山口 徹 ほか 総編集: 今日の治療指針2013年版, 汗疱, あせも, わきが, 多汗症: 1068-1069, 2013
- 3) プロ・バンサイン錠15mg: 医薬品インタビューフォーム, 2013年9月改定(第2版), 2013
- 4) 戸谷取二: ドライマウス患者に対する白虎加人参湯エキス錠による治療効果, 新薬と臨牀, 62 (10): 1884-1888, 2013
- 5) 和木裕一 ほか: 向精神薬で生じる口渴に対するカネボウ白虎加人参湯の使用経験, 新薬と臨牀, 39 (8): 1730-1739, 1990
- 6) 杉田康志: ほてり感に対する白虎加人参湯の使用経験, 新薬と臨牀, 51 (2): 120-123, 2003
- 7) 安井廣迪 監修: 臨床応用漢方処方ガイド, クラシエ薬品株式会社: 39, 2012
- 8) 井上裕之 ほか: 向精神薬で生じる口渴に対する白虎加人参湯の臨床的検討, 新薬と臨牀, 42 (7): 1511-1518, 1993
- 9) 矢久保修嗣 ほか: ジソピラミドにより生じる口渴に対する白虎加人参湯エキス細粒の使用経験, 日東医誌46 (3): 433-438, 1995
- 10) 渡邊昭仁 ほか: 反復性耳下腺炎に対する白虎加人参湯の効果, 耳鼻臨牀, 95 (1): 105-109, 2002
- 11) 内藤真礼生 ほか: 慢性血液透析患者の体重増加に対する白虎加人参湯の効果, 日東医誌, 53 (3): 217-222, 2002
- 12) 堀場裕子 ほか: 更年期男性の不定愁訴に白虎加人参湯が有効であった2例, 日東医誌, 63 (4): 245-250, 2012